

# アバカレ

## 藤宮優姫の真実

何も知らないでいられるなら、それが一番平和なのかも知れない。  
そんな、哲学みたいなことを僕が考えていく。  
だって、知ってしまえば『知らなかった』頃には戻れないんだから。  
知ってしまうことが全てプラスになるなんてことはない。  
知ってしまえば……僕は……。  
そう、僕は知ってしまった。  
暴いてしまった。  
知りたかったことを知る為に知らなくて良いことまで。  
誰よりも知っているつもりで、何も知らなかった彼女の秘密を—————。

———。

—————。

「それじゃ、行ってきま～す」

朝、制服に着替えた僕は少しの眠気と気だるさを残しつつ家を出た。  
特に何が入っている訳でもない鞆は重くもなく、それを持ちながらチラリと隣の家を見る。  
と、そこには———。

「おはようございます♥ ノリユキくん」

———小柄で、緩くウェーブがかかった黒髪を左右で縛っている眼鏡女子、僕の幼馴染で同級生の『藤宮

優姫』がいた。

背は低めで、本当に折れそうなほどに華奢だった。

それなのに、胸はいつの頃からか膨らみだして、その背が低いのも合わさっていつそ凶悪とも言えるほどの巨乳に育っていた。

正直、優姫と話すときは視線に気を付けないと、自然と胸を見てしまうほどのサイズ。

そんな優姫とボクは、家が隣同士で子供の頃からずっと一緒に遊んできた。

大人しくて、優等生。図書委員なんかもやっている優姫。

子供のころから優しくて控えめな性格でいつも僕がみんなの輪へと引っ張って行ってあげていた。

小学校くらいまではそんな感じで、流石に中学になれば一緒に騒いで遊ぶなんてこともなくなってきたけど、仲が悪い訳じゃない。

むしろ、ずっと仲は良い方だと思う。

今でも勉強が出来る優姫と一緒にテスト勉強をしたりするような仲ではあるし——。

「お……はよ、優姫。……………い、行こっか？」

「うんっ♡」

——こんな風に挨拶を交わして一緒に登校するのが当たり前の関係でもある。

と、言っても恋人ではない。

仲の良い幼馴染ってだけでその先の関係には一切至っていない。

僕としてはそろそろ一步踏み込みたい気持ちはあるんだけど、控えめで優等生な優姫、ちょっとの下ネタでも顔真っ赤にしちゃうような純粋な女の子。

告白してもしっかりと想いが伝わるかは不安……………なんて言うのは言い訳で単純に僕に度胸がないから。

「……………」

「それでね、その本の主人公が凄く素敵なの。読んでいくと本当に引き込まれる感じがして、どんどん読み進めちゃうの♡」

隣で最近読んだ本の話を楽しそうに語る優姫。

控えめで、クラスでも目立たないけれどその顔が可愛いのは僕が一番知っている。

やや大きめの制服で隠している胸が、かなりあることも知っている。

彼女のことは誰よりも知っている、知っているけど……だからこそこの関係が壊れるのが怖い。

優しく目を細めて微笑んで、僕に暖かい言葉をかけてくれる優姫、その笑顔を消してしまうことが怖かった。

だから僕は今日も、きっと明日もこの関係を維持する。

「ノリユキくん？　どうかした？」

「ん、なんでもないよ、ちょっとテストのこと考えたら気が重くてさ～」

黙ってしまったボクを心配そうに優しい視線で見つめてくる優姫、彼女の心配を拭い去るように手を振って応える。

名前の通り優しく、控えめで、ずっとボクの隣にいてくれる彼女。

彼女を大切にしたい、だけど……やっぱり健全な男としては今一步、あと少しだけでも前進したい気持ちがあるんだ。

――。

――――。

「ナニコレ……？　催眠……アプリ？　……………あ～、エロ漫画で良くあるやつ」

優姫との関係は現状維持。そんな状況のまま授業を終えて帰宅したある日。

登校は一緒だけど、優姫とは下校は滅多に一緒にならない。

彼女にもボク以外の付き合いはあるから、恋人でもない以上そこまで深く踏み込む訳にはいかない。

そんな訳でいつものように一人で帰宅して、ベッドに転がりながらスマホでネットサーフィンってやつをしていると、妙な広告から広告に飛んで画面に映し出されたのは――。

『あなたの意のままに相手を操れる催眠アプリ』

――なんて言うメチャクチャ怪しいものだった。

エロ漫画でも使い古されたようなやつで、今どきこんなのを信じる人がいるとは思えないようなソレ。

「はぁ……」

呆れながら、そのページを閉じようとしたけど少しだけ、ほんの少しだけ気になった。

もちろん、そんなものが偽物とか嘘だってことはわかっている。

わかっているけど、万が一、億が一にも本当なら、これを使えば優姫に告白というか、優姫がボクをどう思っているか、それくらい聞くことが出来るのかもしれない。

自分でも女々しいのはわかっているけど、頼ってしまいたい。

そう思っていると、自然にボクの指は『インストール』の文字をタップしていた。

「こんなの……本当のはずないけどね……」

そう、いくら子供のボクでも、こんなものが本当にあるなんて思っていない。  
そこまで夢見がちじゃない。  
ゆっくりと動くインストールバーを見ながら、静かに目を閉じた。  
目を閉じるだけで直ぐに思い出せる優姫の姿を思い出しながら。  
その、可愛い顔、柔らかそうな髪、小柄なのにある胸。  
それをゆっくり思い出して、小さく「優姫」と呟いた。  
呟いてから、例のアプリのインストールの終わったスマホを少しだけ強く握った。

――。

――――。

「ここは、こっちの参考書の方がわかりやすく書いてあるから、こっちの方が良いと私は思う、かな？」

「ん、ありがとう……………」

あれから数日後、普通に生活を送っていて、催眠アプリなんて怪しいものを使うタイミングはなかった。

最近は優姫、普段よりも忙しいみたいで中々朝の登校の時間以外に会う機会もなかったんだけど、今度のテストに向けて一緒に勉強しようという願ってもないことになった。

優等生、成績もかなり良くて教え上手な優姫、その優姫の部屋にて、座卓を囲んで勉強をしていく。

今日はお互い、両親が出かけていて完全に二人きり、その緊張感と興奮がどうにも頭の働きを邪魔していく。

丁寧に教えてくれてわかりやすいんだけど、失礼なことにボクは、緊張もありつつ、今日がチャンス？なんて、催眠アプリを使うべきかどうかなんてことに気を取られてケアレスミスが多い。

そんなボクを見かねてか――。

「少しだけ休憩にしようか？ お菓子探してくるね」

――優姫は優しくそう提案してくれた。

彼女が立ち上がって部屋を出て行ったのを見送って一息つく。

そしてスマホを取り出して『催眠アプリ』を起動させる。

「……………この画面を見せるだけで催眠状態になって……………ねえ……………」

催眠アプリ、起動させると怪しい色合いの画面が表示されるだけである。

どう見ても怪しくて、こんなものが効くとは思えない、思えないけど万が一ってことはある。

「……っ……」

もし、効かなかったら冗談ってことで済まそうと決めて優姫を待つ。

少しして優姫はトレイに乗せたお菓子やジュースを持ってきてくれた。

それを食べながら少し休憩して、「そろそろ勉強再開しよっか？」と言って優姫は大きく伸びをした。グッと身体を伸ばしたことで、着痩せするけどかなりのサイズ、クラスでも一番なんじゃないかと思う様なおっぱいが揺れるのが制服越しに見えた。

こんな催眠なんて怪しいものに頼るなんて、そう思っていた感情もそのおっぱいの揺れに一瞬で奪われてしまう。

緊張に生唾を飲みながら――。

「ゆ……優姫、これ……」

「？ なぁに？ ノリユキく……ん……」

――スマホの画面、催眠アプリの画面を見せた。

途端に優姫の表情がぼんやりしたようなものになった。

「え……………嘘……本当に……これ……え？ 優姫？」

まさか本当に効果があるなんて思ってもみなかったので驚いてしまう。

驚きながらも優姫の名前を呼んでみると彼女は寝ぼけているように、甘い声で「なぁに？」と反応するだけだった。

ペタンと座り込んだ優姫のその姿は催眠にかかっている状態にしか見えなかった。

「……………っ！」

“ゴクリ”と、音がするくらい喉を鳴らして唾を飲みこんで、緊張に少し声を震わせながら何度も躊躇いながらも質問を口から吐き出した。

「優姫は……ボクのことを、どう……思ってる？ その、お……男として……」

「……………ん～……」

本当ならこんな質問するのは男らしくない、それくらい分かっている。

するとしてもこんな、催眠アプリなんて怪しいものに頼らないで正面から聞くべきだって分かっている。

でも、そんな踏み込んだ質問をする勇気もない以上、こんな手段に頼っている。

ドキドキと心臓の音が響いていくのを感じながら何度目かの唾を飲みこんでいくと――。

「ノリユキくんの……ことはぁ♡ ふふ……♡ ずっと前から……男の子として大好き、です……♡」

「っ！！」

――優姫からの答えがあり、しかも「前から好き」なんていう最高の答え。

催眠が解けてしまうかも知れない不安もあって大きな声はあげられないけれど、ガッツポーズをしてしまい口元がニヤニヤしてしまう。

ずっと好きだった女の子と両想いだって判明したんだからこれくらい仕方ないことだと思う。

止まらないニヤニヤに口元を隠す様に押さえながら、優姫の答えも聞けたしと催眠アプリを解除しようと思うけれどそこで動きを止める。

「……………両想い……なん、だし……………」

頭を過るのは最低の考えだと自分でも思う。

優姫と両想いだってことが判明したんだから、催眠を解いて告白してゆっくりと恋人として段階を踏んでいけば良いのに頭にはさっき伸びをした時のおっぱいの揺れが焼き付いて離れない。

小柄で大人しくて目立たないけど、クラスもかなり大きいおっぱい、それがすぐそこにある。

しかも、ボクらは両想いなんだし、少しくらい――。

「……………優姫、服を脱いで……………」

――なんて思ってしまい、つい命令をしてしまう。

見るだけ、見るだけだから、なんて言い訳をしながら優姫に服を脱ぐように指示を出した。

優姫はぼんやりとしたまま少し笑みを浮かべると、制服のワイシャツのボタンに手をかけ一つ一つ外していく。

「……………っ、あ……お……」

その指の動作、動きをついつい目で追ってしまう。

そして、ボタンが外されてワイシャツの前が開けられると――。

「すご……うわ……でかっ……！」

――露わになるのは下着、黒のセクシーなブラに包まれた優姫のかなり大きなおっぱい。

知っていたけど、こうして見ると圧巻のサイズだった。

つい「何カップ？」なんて聞いてしまうと、優姫は笑顔で「Eカップ♡」と教えてくれた。

ブラジャー自体も大人しくて控えめな優姫がつけるにはセクシー過ぎるもので、ギャップっていうのかな、ドキドキが止まらない。

「優姫が……こんなブラつけてるんだ……………」

大人っぽいというかもはやエロいって思えるそれを見て生唾をまた飲んだ。

ブラで寄せられた谷間、そのサイズ、かなり大きいEカップ。学年でもかなり上位の方なんじゃないのかな？　なんてまじまじと見てしまう。

そして、さっきまでは「見るだけ、見たらもう終わりにして告白する」なんて思っていたのに、頭の中では「もう少し！　どうせ、付き合いだしたらいつかするんだから！」なんて言い訳が生まれだして、欲望が止まらなくなっちゃってる。

「……キス、して……！」

少し顔を近づけて、自分からのキスじゃなくて、催眠状態の優姫に命令してのキスのお願い。

もう、情けないとかそんな気持ちもなくなっていて、今はもう優姫の身体を好き勝手したい、今日まで我慢したんだし！　なんて思ってしまう。

「キス……うん❤️　いいよ……」

ボクの命令に優姫は小さく頷くと、こっちに合わせて顔を近づけてきた。

近づいてくる優姫の顔。やっぱりカワイイ、なんて思っていて唇が触れた瞬間——。

「ん❤️　ちゅう……❤️　れろお❤️」

「ふっうっ！？　んん！　ちゅうっ！？」

——優姫はボクの首に腕を回す様にして抱き着いてくると、その舌を口の中に挿入してきた。

まさかというか、いきなりのキス。

優姫の柔らかい舌に口の中をかき回されていって、ボクの舌に絡みついてくる。

「れろお❤️　んちゅ❤️　じゅちゅ……❤️　ん……ふ❤️」

熱くて甘い優姫の吐息を味わって行って、その気持ち良さにおっぱいを見た時点で勃起していたチンポが更に硬くなってしまう。

そして、時間にしたら1分くらい？　でも、その何倍も長く感じたディープキスから解放された。

「ぷっはぁ……❤️」

「っ……はぁ……はぁ………優姫っ……」

二人の唇の間を唾液の糸が一瞬光って消える。

それを見送りながら、ドキドキした心臓を片手で押さえる。

まさか優姫からこんな凄いキスをされるなんて思ってもみなかった。

これも催眠アプリの効果？　なんて思いながら口元を手の甲で拭いつつ、もうこうなったら興奮が止まらない。

どうせ催眠で優姫は覚えていないんだし、なんて最低なことを考えながら次の指示を出す。

「ブラ……外してよ、おっぱい……見せて？」

「……❤️　はぁい……❤️」

口の中に残る優姫の味を思い出す様に舌を動かしながら出した命令はやっぱりおっぱい。

他の場所だって気になるけど、やっぱりまずはあのEカップのおっぱいをしっかりと見ておきたい。

優姫は指示を聞くと素直に頷いて、手を後ろに回してブラのホックを外していく。

”たっぷんっ❤️”

「うわ……」

ホックを外して支えを失ったおっぱいが跳ねる姿に、また生唾を飲んじゃう。

期待にチンポを更に硬くしているボクの目の前で、優姫はブラを外した。

「すご………」

ブラから解放されたおっぱい、大きくて、少し乳首がぷっくりと大きくて黒い？

ネットで見たエロ画像の女の人のものよりも黒い色をした乳首が気になるけど、そんなことよりも今はもう目の前のおっぱいに我慢が出来ない。

フラフラと優姫の背後の回り込むと、緊張しながらどうしたら良いかに少し悩んだけど、そんな悩みも忘れるようにその大きなおっぱいを鷲掴みにした。

”むにゅんっ❤️”

「あっ……❤️　んん……❤️」

「お、あ、すご……柔らかくて……凄い……」

手のひらに吸い付くような手触りで、どこまでも指が食い込みそうな柔らかさのおっぱいに手は自然と揉んでしまう。

テクニックなんてある訳なくてただただ”モミモミ❤️”と刺激をしてく。

どこかで止めなきゃと思っているのに、柔らかくて気持ち良い優姫のおっぱいを揉む手が止まらない。そんな、ただ揉んでいるだけ。そんな刺激にも優姫は可愛い声を小さく「あんっ❤️」と漏らしてくれている。

その声にも興奮しちゃって、少し乳首にも触れたりしていく。

そして、おっぱいを触ればもちろん、下も、おまんこも気になる。

小さく「足を開いて」なんて指示を出して、その指示に優姫が素直に従ってくれたら片手はおっぱいを揉んだまま、片方の手をそのおまんこへと伸ばしていく。

震える手で、スカートの奥、指示によって開かれた足の間。

触り心地の良い下着の中に手を入れて、緊張しつつも指をまずは割れ目に当てて、おまんこを探っていく。

柔らかくて気持ち良い穴、そこを2本の指で擦る様に刺激していく内に――

「あ……❤ん❤️」

「っ……わ……」

――あっさりとその指が2本ともするりと飲み込まれていく。

ヌルヌルとした熱い液体で濡れているそこに指が入っていくと、ピクピクと震える様な動きが伝わってくる。

指を入れているだけでもそこが「気持ち良い」ってことはわかってしまう。

ここにチンポを入れるなんて考えただけで、既に限界まで勃起していると思っているのが更に高くなっていく。

「んう……❤ あ……❤ んう……❤」

少し、ほんの少し指を動かすだけで優姫は身体をくねらせて、その度に大きなおっぱいが揺れる。

可愛い声、エロい声に耳からも興奮してしまい、そうなるに我慢もしきれない。

何年も、何年も好きだった優姫。

どんどん可愛くなっていく姿をずっと見続けてきて、こんなチャンスが目の前に来たらもう、自分を抑えきれない。

「は……あ……はあ……」

少し名残惜しく思いながらおっぱいとおまんこから手を離したら立ち上がって、急ぎながらズボンの

ベルトを外してズボンを脱いでいく。

慌てる指先、優姫の汁で濡れた指でズボン、パンツまで脱ぎ捨てて完全に下半身を露出させた。

勃起したチンポを見せつけるようにしていく。

彼女の目の前にチンポを突き出すと、優姫は上目遣いに見つめてくる。

その顔、そして上から見ても大きさがしっかりと伝わってくるおっぱいにドキドキしながら――。

「えっと……ボクの、これを、気持ち良く、して……？」

――なんて、これまた最低な指示を出してしまう。

催眠状態の幼馴染に、両想いだから、なんてことを言い訳にして最低な命令。

キスもさっきファーストキスをしたっばかり、処女の優姫にこんなことをさせるなんて、と自己嫌悪も併発させていくんだけど――。

「ふふふ❤️ ……はあい❤️」

「あっ……………っ、えっ？」

――優姫は何の躊躇もなくチンポを細い、綺麗な指で掴んで下から上に馴染ませるようにシゴきだした。

「ん……❤️ かたあい……❤️」

ボクが指示を出した、それは間違いないし、望んだことのはずなのにその手慣れた刺激に少し疑問を覚えるんだけど、それを上回るくらいに気持ち良い。

その気持ち良さが疑問の元なんだけど、それを考える暇もないほどに、チンポへの刺激が強烈だった。

「れろお❤️ ん❤️ ……少ししょっぱいよ？ ちゃんと綺麗にしないと……れろお❤️ ん❤️ ちゅっ❤️」

「うっあ……すごっい……ううう……！」

先っぽを舐められて、軽くキスをされるだけでカウパーが漏れてしまう。

先走りの汁を漏らしてしまうボクを上目遣いで見つめる優姫は、自分でつけた唾液を指で広げていって、それをローションの様に使って手コキを速めていく。

唾液が加わったことで”ぬちゅぬちゅ❤️”とエロい音までしだして、男を耳からも興奮させるようなそのテクニックにもう翻弄されっぱなし。

そのまま今度は優姫が小さな口を広げて――。

「あむっ♡ じゅるる♡ ん♡ じゅちゅるる♡」

「ひっうっあ……！ すっ……！ あ！」

——本格的なフェラチオ開始。

それはもう、AVとかエロ動画で見たようなフェラチオ。

ボクのチンポを咥え込んで、ふわっとした髪を揺らしながら、エロい音を立ててしゃぶっていく。

メチャクチャ気持ち良くて自然と腰がカクカク震えてしまい、立っているのも辛くなるほどの快感。

「れるれる♡ れるる♡ ん～♡ ちゅぼっ♡」

頭を揺らして、柔らかい唇でチンポを扱われる気持ち良さ、それに加えて亀頭を舐められる。

さらに、垂れてくる唾液とカウパーをローション代わりにするみたいにしての根元を扱く手コキ。

一つでも気持ち良いものが合わさって襲ってくるような快感はたまなくて、本当に変な声が漏れそうになってくる。

そのまま、あっさりと本当に何の我慢も出来ずにそのまま射精しそうになるんだけど——。

「ふはあ……♡ ん……♡」

「っ！ え……な、ん……なんで……」

——優姫はギリギリでフェラを止めて口を離した。

本当にあと少しで射精だったのによって気持ちでいると、彼女は一旦ボクから離れて鞆から小さな透明の液体が入ったボトルを取り出した。

「？」

それが何か、優姫が何をしようとしているのか、そんな疑問を覚える。

でも、それを聞くのが、言葉にするのが怖いという気持ちでいたら彼女はそのボトル、細いノズルを咥えて中身を口の中に入れ出した。

本当に何をしているのか、それは飲み物なのか、それすらわからないでフェラへの名残惜しさにチンポを震わせていたら。

「ぐちゅ……くちゅ……ん♡」

優姫は口の中に液体を入れて、モゴモゴと、口内を漱ぐような動きをしていた。

そして、少ししてそれを「あえ～♡」と自分のおっぱい、その谷間に向けて垂らしていった。

「……ロー、ション？」

優姫の口から垂れるのは透明だけど、ねっとりとしたもので、ボク自身は使ったことないけど、AVとかで見たことのある潤滑油、ローションだった。

何でそんなものを鞆の中に入れていたのか？ それを口の中に入れたのはなんで？ そんな疑問を持っているボクだったが、その疑問も直ぐに頭から消えてしまう。

「ふふ……♡」

エッチな、エッチ過ぎる雰囲気を含ませながら微笑んだ優姫は、膝立ちになると、そのローションを垂らしたおっぱい、その谷間でボクのチンポを——。

”むにゅん♡”

「っわっ……！」

——挟み込んできた。

それは、当然知っているパイズリというプレイ、男の夢ってやつかも知れない。

大きなおっぱいにチンポを挟み込まれる気持ち良さ、柔らかくてスベスベの谷間で擦られる。

ただでさえ気持ち良いのに、ヌルヌルした少し暖かいローションがまた気持ち良い。

あまりの気持ち良さに意味のある言葉も出せないまま身体を震わせていきながら、優姫がローションを口の中に入れた理由を理解した。

常温だとひんやりするローションを、唾液と混ぜて自分の体温で温めようとしてたってことだった。

それに気付いて、改めて「優姫はなんでそんなことを知っている？」という疑問が浮かび上がるけれど、それよりも何よりも気持ち良すぎて頭が回らない。

「れる♡ ん♡ れるれる♡ いつれも……ちゅっ♡ らひて、ね？」

”むにゅん♡ むにゅ♡”

優姫が両手で自分のおっぱいを左右から挟み込んで上下に動かしたり、捏ねるように揉んだりしながらのパイズリに、さきっぱを啜えての亀頭舐め。

チンポ全体が気持ち良くてたまらない状態。

腰をガクガク震わせて、エロい音、刺激に脳みそまで蕩けそうになっていく。

下半身は気持ち良すぎてもはや感覚がなくてどう立っているかもわかんない。

わかんないけど——。

「うっあ……っ！ 優姫っ、出るっ……！ 離れてっ、優姫っ……！ っ！！」

———射精することくらいは理解出来て、このままだと先っぽを咥えて刺激する優姫の口の中に射精してしまうと慌てる。

離れてと言っているのに離れてくれずにパイズリフェラを続ける優姫、その頭を左右から掴むようにしてどうには引き離そうとしても、どうにも離れてくれない。

そのままチンポは気持ち良さにあっさりと限界を迎えてしまう。

柔らかいおっぱいと、口の刺激に耐えきれずに———。

「っ！ あっ……！ 優姫っ……！ あああ！」

”びゅるるるっ！”

———そのまま彼女の口の中に射精してしまう。

興奮していたのもあって、かなり濃い精液、量もあるそれを出してしまった感覚。

「うあ……………」

気持ち良すぎてもう足もガクガク、マラソンを走りきった後みたいに力が入らないでいたら———。

「れろお❤️ じゅるるっ❤️」

「え？ あ！」

「じゅるるるる❤️ ちゅじゅるるるるう❤️」

———追い打ちをかけるように優姫は尿道に残った精液まで吸いつくそうとしていく。

射精直後で敏感になったチンポへの刺激に「ひあああ！」なんて悲鳴みたいな声をあげてしまう。

そして、吸いつくし切ったのか優姫がようやく口を離してくれて、そのままフラフラと床にへたりこんでしまった。

あまりの気持ち良さ、優姫がなんでこんなに上手いのか？ という疑問を覚えるボクの前で———。

「ん……❤️ ごくんっ❤️ ふううう……❤️」

———優姫は口の中に溜まっていた精液を、ボクの出した汁を飲み込んでいく。

エロく、本当にうっとりしたような表情で片手を頬に当てた優姫は———。

「ごちそうさまでした❤️ おいしかったあ❤️ ふふ❤️」

——精液を当たり間の様に飲み込んで「美味しかった」とまで言ってきた。  
優しく可愛く、控えめな彼女。  
何年もずっと見てきたはずなのに、優姫の初めて見る姿、表情だらけだった。  
一番ボクが優姫をしっているはずなのに——。

「……………っ！」

——きっとこの催眠アプリのせいだ、そう思って、もうこんなことは止めようとした。  
したんだけど——。

「……優、姫……………」

「ん……❤️」

——シュルリと軽い衣擦れの音をさせて優姫はボクの目の前でスカートも、そして少し濡れた下着まで脱いでいく。

まだ、何も命令していない、指示は出していないのに。

さっきまでは止めようとしていた、それは確かなのに、ハッキリと見せつけるように優姫が足を開くと、その気持ちは完全にどこかにいってしまっていた。

初めて見た生の、無修正のおまんこに完全に目は釘付けになってしまう。

少しはみ出て、色素の沈着しているそれ、だけどそんなことなんて気にもならないで凝視していると、優姫はそこを左右の指でそっと開いた。

「……❤️ ノリユキくん……………おちんちん……挿れ、て？」

「！！ ……っ！」

こんなことはもう止めないと、そう思っていたし、何の指示も出していないのに、何で優姫がこんなことをしているのかという疑問ももちろんある。

あるんだけど、それでもボクは——。

「っ、はぁ、はぁ、この、へん？」

「ん……❤️ もう少し、下……ん～、もうちょっと、さっき指入れた時のこと思い出して？」

——完全に裸になると、仰向けで寝た優姫のおまんこにチンポを擦りつけていた。

コンドームもつけていないチンポで、ヌルヌルとした汁が溢れてくるそこを擦っていく。

優姫にリードして貰いながらという恥ずかしい状況だけど、上手く挿入できない以上仕方なくて、さ

つき射精したばかりなのにもう硬くなっているチンポで擦っていく。

「っ……なんで……上手く入らな……い」

「ん～……………」

ヌルヌルと滑っていくことと緊張でどうにも上手く挿入できないでいく。

かなり恥ずかしい気持ちもあるけど、今はもう童貞卒業のことで頭がいっぱいで焦れば焦るほどに上手くいかない。

そんな状態のボクの腰に優姫の足がするりと巻き付いた。

「え？」

「動かなくて良いからね……？ ん……あ❤️」

「っ！！？」

何を？ と思ったら、直ぐにその足がボクの腰を抱きかかえるようにして押してきた。

そのままさっきまであんなに苦労していたのは嘘みたいに、スルリと何の抵抗もなく挿入出来た。

「え……っ、なん……っ！」

初めてのセックス、ボクの童貞卒業は非常にあっさりと終了して、その気持ち良さに腰が震えていく。

震えていくんだけど、優姫のそこ、おまんこに何の抵抗もなく挿入出来てしまったことに疑問を覚える。

普通、もっと入れるときに苦労したり、何よりも——。

「血が……出てない……？」

——チラリと二人の繋がっている場所を見ても、そこには処女喪失の血が出ている様子もない。

ボクのが小さすぎる？ いや、そんなことは無いと思うけれど、なんでこんなにすんなりと当たり前みたいに挿入出来るんだ？

その疑問、さっきから何度も頭の浮かんできた疑問が形になっていく。

「あ❤️ んう……❤️ 結構大きい……❤️」

「……………」

ウツトリとまるで『他のチンポとのサイズを比較している』ような呟きを漏らす優姫。  
それは、つまり『そう』なのかも知れない。  
その疑問、もうここまで来たら無視なんて出来ないかも知れない。

なんで、こんなに手慣れてるんだ……？

強く疑問に思うけれど、その秘密に手をかけるのは怖かった。  
ずっと好きだった大切な彼女、優姫のことは何でも知っているつもりだった。

「ん……う❤️ れろ❤️ 精液の味……❤️ まだ残ってる」

なのに、今日の前でまだ口の中に残る精液の味を楽しむ姿は一切知らない。  
唾を飲みこむ音が大きく聞こえる様な緊張感の中で、僕は質問をした。  
気になったことは色々、本当に色々であったけれどまずは――。

「処女……じゃないの……？」

――とても大切な、ボクにとっては非常に大切な質問をした。  
別に処女じゃないと絶対に嫌だなんて思っていない、いないけれど、非常に気になっているし大切なこと。  
その質問に優姫は優しい笑顔のまま――。

「うん❤️ 違うよ？ 私のあそこは……❤️ 使用済み❤️」

――あっさりと答えてくれた。  
その答え、処女じゃないという言葉に、そのショックにボクは射精、してしまっていた。  
ビクンと震わせて、情けなく、降伏宣言をするように射精してしまう。  
最初の、優姫とのセックスでの初めての射精は情けない、快感ではなくてショックによる射精だった。  
頭を殴られたような衝撃なんていうのは小説とかにおける比喻だと思っていたけど、それがあながち間違いじゃないってことを知った。  
本当に、頭を殴られたようなショックで、脳みそが揺れた。

……優姫が処女じゃない。

その事実にボクは吐きそうになってしまっていた。  
目の前がクラクラと回っていき、溢れる涙で視界が滲んでいく。

「う……あ……………」

まともに意味のある言葉も出せないほどのショックを受けるボクに、優姫は優しい笑顔で「なあに？」  
ねんて、まるでお姉さんか何かの様に聞いてくる。

それに応える余裕もなく、ただただ手足が震えていく。

優姫が処女じゃないことに対するショックは、言い換えれば――。

『優姫の初めての相手がボクじゃない』

――ことに対するショックでもあった。

傲慢と言われればそうなんだろうけど、優姫の初体験はボクであり、ボクの初体験は優姫である。そう  
信じて疑うことはなかった。

きっと、このままお互いに成長して、今年か、来年には付き合いだして、デートをして、手をつないで  
キスをして、そしてセックスをする。

お互いに初めてのまま、初体験のままするもんだと信じていたし――今でも少し、信じている。それが  
現実逃避でしかないと知りながら、ボクは未だに優姫とのお互いに初めて同士の初体験を夢見てしま  
っていた。

そんな、優姫が処女じゃない、その事実を受け止めきれないままに射精をして、彼女はそれを楽しむ様  
に微笑んでいた。

既に、心が砕けそうなショックの中、チンポを震わせながら、これ以上知ったらどうになってしまうのか  
という恐怖の中で口を開いた。

「優姫……今まで、誰と……いつ、どんなエッチなことを、し、てきたか……教えて……。本当に…  
……ボクのこと好き……なの？」

その言葉に優姫はウツトリとした表情で、凄く、凄くエッチな笑顔を見せた。

ずっと一緒にいて、一度も見たことのない笑顔。

――。

――。

「ふふふ❤️ ノリユキくんのが好きなのは本当だよ？ 本当だけど……❤️ 初めては他の人にあ  
げちゃった❤️」

ボクのが好きって言葉には安心はするけど、安心の後にはショックな言葉。

初体験はボクじゃない、わかっていたけど、凄く、脳が揺さぶられるような感覚だった。

「えっとね、う～ん、私って結構他の子よりエッチなことへの目覚めって早かったんだと思うんだ……

♡」

「子供のころからずっと『イイ子』で過ごしていたから、かも？ 気づいたらイイ子で、褒められて期待されて、それがすっごく辛かったの」

「だから……なのかも知れないけど、初めて一人エッチしたのもそういう『イイ子の私』から逃げるため、10歳の誕生日の前にしちゃった……♡」

10歳の前ってことは9歳。

その頃にもうオナニーをしていたってことに凄く、凄く驚いた。

下ネタとか、その手の話題が苦手だって言っていたのに、それなのに、誰よりも、男子よりも早く一人オナニーをしていたなんて。

優姫の知らない姿をどんどん見せられることに、ゾクっとしてきてしまう。

「一人エッチ♡ オナニー覚えてからはっ、どんどんハマっちゃって♡ もちろん、本当のエッチも気になりだしちゃってたの……♡」

ボクの知らない優姫。

何も言えずに固まっていると優姫は「腰、動かして？」と言ってきたのでぎこちなく、ゆっくりと慣れない動きをしていく。

「んっ♡ う……♡ あの頃♡ 何回もノリユキくんを誘惑してみたんだよ？ あ♡ 気づいてた？」

優姫の言葉にボクは首を振った、全然気づかなかった、と。

「ウ・ソ♡ ふふ、っ♡ おちんちん、大きくさせてたの、知ってるんだよ？ あ♡ もう♡ なのに、何にもしてこない、からっ♡ だから、我慢できなくて♡ ん、6年生になった頃に……♡ 塾の先生と……♡ しちゃった♡ 初エッチ♡」

初体験の相手。しかも6年生の時だという。

その予想外の相手と年齢に、ボクは動くのを咄嗟に止めてしまう。

「もう……止まったらダメ」と言われて腰を慌てて動かすけれどショックが抜ける訳じゃない。

だって、塾の先生、それはボクも同じく通っていたので知っている。

優しくイケメンの先生で、生徒からも保護者のお母さんたちからも人気の人だった。

女子にだけ優しいって訳でもなくて、ボクにも男子にも優しく接してくれた先生。

そんな相手と……優姫が……？

「はああ、ん♡ ン、みんな、気づいてなかった、みたいだけど……♡ 先生はちっちゃい女の子が好きみたい、だったの♡ ふふ♡ すごく私のことをエッチな目で見てきたから♡ 何回もっ、ん、そこっ……♡ もっと……♡」

「っ♡ 何回も質問しに行くふりしておっばいとかチラチラ見せてたら……♡ ン♡ ふふ、家にお招きされちゃいました♡」

悪戯っぽく微笑んで見せる優姫だけど、言ってることはとんでもない。

だって、何歳が離れた相手、しかも六年生……12歳で、エッチを、したなんて……。

どんな風に優姫がエッチをしたのか、それを考えてしまうボクに彼女は――。

「そこで♡ エッチ♡ しちゃった♡ 処女を奪われちゃった♡ ふふ♡ 先生のすごく太くておおきなおちんちんで、おまんこ一気に深くまで使われちゃった♡ スゴク痛くて……♡ でも、気持ち良かったあ♡」

「何回も、だよ？ その日のうちに、っ♡ 一回二回じゃなくて、多分♡ 五回はしたと思うの♡」

――クスクスと悪戯が成功したように笑う。

「あのとき、ノリユキくんがもう少し勇気出してくれてたら♡ ン♡ 私の未使用おまんこ♡ 処女のまま味わうこと出来なのにね……♡ ざあんねん♡」

ボクを挑発するようからかうように優姫は微笑む。

わざと「本当に誰でも良かったんだよ？ ノリユキくんでも大歓迎だったのに♡」なんて言ってきて当時のボクを責める。

その言葉を聞きながら、ボクは、ボクは情けなくも再び射精してしまう。

初めてのセックス、二回目の射精も情けない、降伏宣言のような射精。

喜ぶべきなのに、これっぽっちも喜べない、喜べないままにチンポだけは直ぐに硬くなってしまっていた。

「んう……♡ ン♡ 先生はとは、それからも♡ ふふ♡ ン♡ 今でもエッチしちゃってるけど♡ 中学校に入ってからはずっと……♡ もおっとエッチ……好きになっちゃった♡」

「あっあ♡ ン♡ 中学生の頃があっ♡ いっ♡ 一番、エッチ……してたかも♡ 男の人って、その、小さい子♡ 好き、だから……んんっ♡」

腰を振る僕を優しく見つめながら彼女の話は続く。

あれほど近くにいたと思っていた優姫が語る日常はまるでファンタジーの世界のように感じられた。

「私っあ♡ エッチも好きなんだけど♡ おしゃぶりするのも……好き、かもっ♡ んんっ♡ 先輩たち5人くらいのおちんちん♡ 朝からはお昼くらいまでずうっとレロレロ舐めてお口に精液出して貰ったこともあるのっ♡ 精液でお腹……いっぱいになっちゃった……♡ しかもお、ふふ♡ お弁当食べきれなくてっ♡ ん♡ 食べてノリユキくんに食べて貰ってた……よね？ 懐かしいかもっ、ああ♡ もっとっ♡ ん♡」

語られる思い出を聞きながら腰を振っていく。

彼女が言うように確かに、あの頃優姫は僕によくお弁当のオカズを食べきれないから食べてとお願いしてきていた。

それを僕は「ラッキー」なんて思って食べていたのに、それなのに……。

バカみたい喜んでいた僕の知らないところでそんなことをしていたなんて。

考えれば考えるほどに絶望的な気分になるのに腰は止まらないし、優姫の『思い出話』も止まらない。

「部活、あとのっ♡ 汗臭いおちんちんだってっ♡ ん♡ じゅぽじゅぽ音立てておしゃぶりしてたんだよ？っ♡ 私が髪縛ってるのは、っ♡ おしゃぶりしてる時に掴んでもらうため、なの♡ これ引っ張られてお口にチンポ、入れて貰うのすっごく好き♡ 私……乱暴にされるの大好き、だから♡」

「もちろんっ♡ んんう♡ 先生とも、いっぱい、したよ？ はあっ♡ ほとんどの先生とエッチ、した、かも♡」

「先輩たちも良かったけど♡ あっ♡ 先生たちも、すっごくがつついてきて♡ もう、一晩中エッチしちゃうこともあったん、だからね？ んっう♡ ほらっ、夏休みっ……♡ はあ、塾の合宿なんて嘘言っ、先生たち5人とっ♡ 3日間エッチ、しっぱなしだったことだって、あるんだから♡」

先輩、そして先生ともしている、してきたという優姫。

夏休みの合宿、というかボクとしては夏休みに優姫と出かけたりしたかったのに、用があるというから中々会えなかったりしていた。

ボクが優姫と会えないでガッカリしている間にも先生たちとセックスをしまくっていたと聞くと胸の奥が苦しくなる。

「ん♡ んんう♡ 2年生の頃、だったかなあ……♡ ノリユキくんが、お祭りに誘ってくれた日も先輩たちとお祭り楽しんでたんだよ？ ふふ♡ 浴衣で♡ もちろん……♡ ノーパンノーブラっ♡ 下着一つもつけなくて薄い浴衣でおっぱい触られたりしながらお祭り歩いて……♡ その辺でエッチ……しちゃった♡」

「周りを先輩たちに囲まれて♡ おまんこ弄られながら歩いたりっ♡ んんう♡ 金魚すくい、で♡ しゃがんで♡ わざとお店のおじさんにおっぱい見せちゃったりもしたの♡ あっ♡」

「あ、その時、ノリユキくんもいた、よね？ 私が断ったからお友達とお祭り来てたの、見たよ？ ノリユキくんが、んん♥ お祭りのクジやってる近くで♥ 私、先輩たちのおちんちん、シコシコしてたの♥ 手に出して貰ってそれをゴックンも♥」

覚えている。

中学二年の夏休み。優姫に告白をしようと思って隣の市でやっている大きめの祭りにデートに誘った日のこと。

ボクは真剣で、本気で、本気で優姫のことが好きで告白をしようとしていたのに、その日優姫は先輩たちに玩具にされていたという。

過去の苦い記憶に、更に苦い事実をぶちまけられて、気分が悪くなりながらも腰を振る。

ゆっくりと動きに慣れてきていて、優姫も「上手だよ♥」なんて言ってくれるけどそんなものは何の慰めにもならない。

「アナルも開発したのその頃……♥ かも、あ♥ ふふ♥ 私、お尻の穴も使えるんだよ？ ネットで知り合ったおじさんに念入りに開発して貰ったから♥」

「指と、お口とバイブで♥ しっかりじっくり♥ お尻の穴で気持ち良くなれるように、ケツマンコになるまで♥」

「おかげで♥ あ♥ アナルでもしっかりイける身体にして貰えたの♥ んう……♥」

中学二年の頃にアナル開発。

ボクはその頃は何をしていたらうか？

多分、今とあんまり変わらない、ゲームや漫画に夢中だったと思う。

だけど、その頃に優姫はアナルまで使えるようにされていた。

「ん……♥ この、部屋でもエッチ♥ 何回もしたんだからね？ 私のベッドでも♥ ほら、今日みたいに、んっ♥ うちの両親、留守にすること多いから♥ そういうときは……ね♥ 寂しくて♥ 男の人呼んじゃうこと多いの♥」

「だから♥ ん♥ あ♥ 大人の人も多いから♥ 灰皿、こっそり持ってるんだ……♥」

「おじさんのタバコ臭い口でキスして貰いながら♥ あ、ん♥ ノリユキくんよりも、深いところまでおちんちん入れてもらおうと、すっごく♥ 気持ち良くなっちゃうの♥ んん♥ ノリユキくんのもの、んう♥ 悪くはない、けど……♥ ふふ♥」

寂しいときに男を部屋に呼ぶなんて、本当にヤリマン、ビッチのようなことをあの優姫がしているな

んて信じられない。

信じられないとか信じたくない気持ちでいっぱい、涙も溢れてくる。

おじさん、中年の男相手にもセックスを当たり前に行っているという、それなのにボクは今日が初めて。ずっと好きだったのに……。

「ん……♡ ちょっと♡ ポジション変えるね……♡」

もうされるがまま、ただただ泣きながら腰を振っていくと、優姫はチンポを挿入されたまま体位を変えてきた。

ボクを床に寝かせての騎乗位。

ペタンと可愛く座り込むような姿勢で、その腕の間に大きなおっぱいを”むにゅ♡”と挟み込んで見せていた。

その、おっぱいをエロく見せるテクニックもボク以外の男との行為で磨かれたと思うと、それもまたショックで、悲しくなる。

優姫はおっぱいを見せつけたら、わざとゆっくりと身体を倒してきて胸を押し付けるようにしてきた。

柔らかさに興奮する暇もなく、熱い吐息が耳にかかるくらいの距離に口を寄せてくる。

胸を押し当てて、ボクに密着したまま、優姫は慣れた動きで腰を振りながらドンドン追い打ちをかけてきた。

「乱交って、あん♡ わかる？ たくさんのっ♡ 男の人、女の人でも何人かいるエッチな、パーティー♡ それも、参加したこと、あるのっ♡」

「パパ活で、知り合ったおじさまに紹介されて♡ っ♡ 参加させて貰って、いっ♡ 何人も、多分、一日で20人くらいともエッチしちゃった♡」

「色々なおちんちんを、おまんこにも♡ あっ♡ もちろん♡ アナルにも入れて貰ってっ♡ 両方同時にしてもらったことも♡ んんう♡ あるんだよ？」

「私っ♡ 結構、人気で……♡ はあ♡ 将来っ、AV女優にならないか？なあって誘われちゃった……♡ 私が♡ AV出たら♡ ノリユキくん……んんっ♡ 買ってくれる？ あ♡ イクっ♡ んっ♡」

耳元で囁きかけられる言葉にゾクゾクしてきてしまう。

熱い吐息と共に流し込まれたのは、乱交という言葉。

乱交パーティーなんて言葉、優姫の口から出るなんて本当に予想外。

予想外にもほどがあるけど、それはボクが『優姫のことを全く知らなかった』からでしかない。

今も、手慣れた動きで腰を振る優姫、こんな姿を見たことも想像したこともなかった。

AVだって、もちろん。

しかもAV女優？ 冗談だとしてもその言葉は深くキツク僕に突き刺さっていく。

「AVは、まだ♡ だけどっ♡ ハメ撮りは♡ して貰っちゃった♡ ん♡」

「ノリユキくんも、あ♡ 観たことあると思うけどっ♡ 先輩が、後輩たちに回しちゃったから♡ ん♡ あ、結構前に、巨乳JCのハメ撮り、なんて♡ 回ってこなかった？ ふふ、あれ……私だよ♡」

巨乳JCハメ撮り。

確かに覚えている、覚えているというか保存もしてある。

クラスメイトが「すげえエロいの先輩に貰った」と言って見せてきたもの。

顔は映ってないんだけど、かなりエロくて、優姫に似てる声ってことで凄く興奮してそれで何回もオナニーしていた。

それが、まさか本人だったなんて。

ボクはほんの数分の動画で必死にオナニーしていたのに、先輩たちはその優姫本人を好き放題犯していたなんて。

それを考えるだけで苦しくなっていってしまう。

「あっ♡ ん……♡ 最近っ♡ ここ、一週間くらいは♡ 先輩の、大学のサークル♡ そこで玩具にして貰ってるの♡」

「JKとエッチし放題ってことで♡ ん♡ 大人気で大盛り上がり、なんだよ？ あっ♡ イクっ♡」

「裸のままカラオケ、しちゃったり♡ コンビニにリモコンバイブつけてお使いいかされたりっ♡ はうっあ……♡」

「アダルトショップでも♡ バイブ♡ 買うように言われて♡ その場で店員さんに入れて貰ったりしちゃった♡ んんんっ♡」

「それで……♡ 恥ずかしいもの♡ 好きになっちゃった♡ んっ♡ ふふっ♡」

更にここ最近忙しかったもの全て、全て男絡みであることを暴露してくれた。

しかも、ただ犯されるだけじゃなくて優姫がいったようにまさに玩具だった。

ボクは優姫に中々会えなくて、寂しい思いをしていたというのに。

「ふっ……♡ 輪姦も♡ もう、慣れちゃった♡ ふふ♡ エッチしたことある人100人くらいまでは数えてたけど……♡ そこから先はもう覚えてないの♡」

「あ……でも❤️ 100人目はしっかり覚えてるよ……❤」

既に経験は100を超えるという優姫。

ボクはもう、100分の1ですらない、何人も何人もが味わってきた優姫の身体を一番最後に味わっている。

本当に情けない、本当に悲しくなる、ボクがもっと、もっと早くに優姫に告白していたら、そうしたらこうはならなかったかも知れないのに。

身体を密着させながら、激しく腰を振る彼女のおまんこに、もう何回目かの精液を吐き出していくと、優姫は自分のスマホを取り出して、その画面をボクに見せてきた。

「あは❤️ この人……❤ 100人目……❤」

見せられた写真。

スマホの画面に映っているのはどこかの、ラブホテルっぽいベッドに寝ておまんこを広げて見せる、今より少し幼く見える優姫。

おっぱいも今よりは小さく見えるけど十分に立派なサイズ。

その優姫のおまんこからは精液が垂れていて、セックスをした後なのがハッキリわかった。

しかも、彼女の太ももには『祝★100人達成！』なんて馬鹿げた落書きまでされている。

その優姫を、その肩を抱いているのは――。

「ノリユキくんのお父さん❤️ マサユキさんが……❤ ふふ、私の100人目の人なんだよ❤️」

――ボクの、ボクの父さんだった。

まさかの、ありえないことに本気で驚いて本気で目を見開いた。

なんで、どうして、なんて言葉が頭の中で巡って行き、優姫は上半身を密着させたまま腰の動きをゆっくりとしたものに変えて行く。

汗ばんだ肌、柔らかくて大きなおっぱいが当たる感触をボクに味合わせる様な動きになり、それを喜んで良いのかも知れないけど、そんな気持ちも湧いてこない。

驚きと、ショック。

ずっと好きだった幼馴染と、父親が肉体関係があったなんて受け入れられる話じゃない。

そのショックにクラクラしているボクの耳元に優姫は舌を這わせる。。

「この日はね……❤ 覚えてる？ ノリユキくんと喧嘩しちゃった日❤️ あの頃エッチに夢中でノリユキくんのお誘いを何回もお断りしちゃってたの❤️」

「私もエッチに夢中だったし、この頃先輩たちが私を連れ回すから土日とかほとんどエッチばかり❤️」

「それで、その日もノリユキくんからのお誘い断って、喧嘩になっちゃって……❤ 私、家まで謝りに

行ったんだよ？」

「でも……怒ったノリユキくんは会ってもくれなくて♡ ふふ、エッチ、させてあげようと思ってたのに……♡」

「そしたら、ノリユキくんのお父さん、マサユキさんが声をかけてくれて、慰めてくれて……♡ ノリユキくんに似てるお顔とか見てたら……♡ ムラムラしちゃったの♡」

「そ・れ・で……♡ エッチ、しちゃった♡ マサユキさん、久しぶりだったみたいでスッゴク激しく♡ もう、ワンちゃんみたいに後ろから思いっきり突かれて♡ 一発で好きになっちゃった♡」

「それからは、今でも私はマサユキさんの愛人♡ やってるんだよ？ ふふ♡ 実はあ……ノリユキくんのお部屋でもしたこと……あるの♡」

「ノリユキくんが遊びに行ってる間に忍び込んで♡ 二人でベッドに匂い染みつかせるくらい何回も♡」

「マサユキさんのおちんちん、ノリユキくんよりも大きくて♡ もう、一回奥まで入れて貰うと、それだけでイキそうになっちゃうんだ♡」

「普段は優しいけど、ふふ♡ 私が乱暴にされるの好きってわかってるから、お尻を叩いてきたり♡ 結構激しいの……♡」

「すっごく相性良くて♡ 今でも週に一回は絶対エッチしてるんだあ……♡ ふふ♡ このままだと……♡ 私、ノリユキくんのママになっちゃうかも……♡ 」

優姫の語る父親とのセックス。

愛人としてなのか、ボクの父さんを名前で呼んでいく、もう呼び慣れているようだった。

信じられない気持ちはあっても、真実でしかない。

見せられた写真、多分2年くらい前の物だったけど、その頃から今でも優姫はお父さんの『愛人』をやっているという。

どこまでも追い詰めてくるような衝撃に真実に頭がクラクラしてくる。

「あ……♡ もちろん、ノリユキくんのが好きなのは本当、だからね？ 大好き……♡」

また身体を起こしていき、腰をくねらせてチンポを刺激してくる。

軽く髪をかきあげて、セクシーな雰囲気、色気を滲ませながらボクのことを『好き』だと言ってくれるけど、その言葉はもう胸に何も響かない。

「ノリユキくんのこと、思いながらエッチ、するときもっ♡ 多いんだから、ね？」

「窓開けてっ♡ あ♡ ノリユキくんのお部屋、見ながらしたことも、あるしっ♡」

「んんう♡ 電話しながらも♡ はあっ♡ 先週も、だよ？ あの日、夜電話してたとき♡ ふふ♡ 先生とエッチしてたの♡ 今みたいに騎乗位で♡ あっ♡」

「あっ♡ ん♡ 先月、ほら、映画見に行った時なんて……♡ んっ♡ 途中でトイレに立ったけど♡ あれ、たまたま来てた先輩に呼び出されちゃって♡ おトイレでエッチ♡ してたんだよ？」

「ノリユキくん全然気が付いてくれなかったけど♡ ん♡ 体調悪いふりして三回もトイレに立って♡ その度に違う先輩とエッチして♡ それから戻ってきたの……♡」

聞かされる言葉は絶望の連続。

優姫とのデートだ、なんて舞い上がっていた時でさえも、彼女は他の男とセックスをしていたという。

あの日、映画の後も色々デートコース考えていたのに、「冷房で身体冷えちゃったのかも」なんて言って、そのまま帰ってしまった優姫。

きっとその後だって――。

「うんっ♡ もちろんっ……♡ その後は先輩たちとエッチ♡ しちゃった♡ 何人も呼んで、んう♡ 結局6人くらいいたかも♡」

「デート中にちょっとづつエッチした分、溜まってたから……♡ すっごく、激しくしちゃった♡」

「デートしてたのもバレちゃったから♡ 先輩たちにつ♡ からかわれて♡ 両方の穴におちんちん入れて貰って、何回もイカされちゃった♡」

「こんなヤリマン好きになる男いるのかよ。なあって笑われちゃった♡」

――やっぱり。

ボクが純粋に心配していて、何回もLINEを送ったのに既読もつかなかったことを思い出した。

その時優姫は、先輩たちとの輪姦セックスに夢中だったんだ。

本当に、ボクは……どこまでも何も知らないで、どこまでも情けない。

涙がどんどん溢れていた。

「はああ♡ きもちい……♡ あ……そうだ……♡ ね、ノリユキくん……何回も私の中に射精してるけど……もし、それで妊娠したら、どうする？ 責任……取ってくれる？」

腰を振りながらピクピクと身体を震わせる優姫。

その彼女が今更なことを言ってきた。

そう、ゴムもしないでセックスを始めてボクは当たり前のように何回も射精してしまっていた。

ショックすぎるエピソードの連続に忘れていたけれど、相当やばいという事実が気が付いてしまう。

だけど、そのボクの顔を見て満足したのか、優姫は悪戯っぽくクスクス笑って平然と告げてきた。

「なんてね❤️ 射精、いくらでもして大丈夫だよ？ 妊娠はしないから❤️」

からかうようなその言葉と表情に、ボクは聞きかじっていた『ピル』という避妊薬？を飲んでいるのかと安堵した。

謎の安堵で少し力を抜くボクを見て、また優姫は笑うと片手を、自分の下腹部に当てて撫でるように動かしていく。

その動き、どこかで見たことあるようなジェスチャーにボクの心臓はまたドキドキと早鐘を打っていた。

ジェスチャーから頭に浮かんできた予想、予感、それがしっかりと言葉になる前に、優姫は笑いながら告げた。

「だって……今、私……❤️ 妊娠してるから❤️ ここに赤ちゃん、いるの❤️」

妊娠している事実をあっさりと、当たり前のように告げてきた。

「誰かな～……ん～、タイミング的にパパ候補は10人はいるかも❤️」

その言葉を、誰の子かもわからない赤ちゃんを妊娠してるなんてことを聞きながらボクは――。

”びゅるるっ！”

――と、何回目かの射精をしてしまいチンポをビクつかせる。

優姫はボクの精液を受けて「あ❤️ まだ出るんだ❤️ ん❤️」なんて甘い声で腰をくねらせていた。

しかし、そんなことよりも、今大事なものは妊娠の発言、その真偽だ。

まだ学生である優姫が妊娠している、それは相当な大事件。

だって、今は目立たないけど、このままじゃいずれお腹は大きくなって、そうなれば優姫の退学は必至だと思う。

それなのに、優姫は平然としている。

「あ、もちろん墮胎（おろ）すから、産んだりしないよ？ 私、まだ子供だから❤️」

墮胎することを当たり間のことのように告げる優姫。

「先生にお医者さん教えて貰えて本当に良かったあ❤️」なんて、墮胎することの罪悪感も何もない発言をあっさりする優姫。

「先生、私以外にも色々“オイタ”してみたいで、その辺詳しいんだよ❤️ そのお医者さんもエッチ割引してくれたし、お友達みたいだったんだ～❤」

そこでもセックスをしていたと優姫は楽しそうに笑う。

もう、優姫の中で妊娠も墮胎も、ただの行為のアクセントくらいになってしまっているようだった。

「ふふ❤️ んう❤️ 初めての妊娠は……塾の先生❤️ 初潮来てたのに、あれだけ生でエッチしてたら当たり前だよね❤️」

「だから、初めての墮胎は中学校の頃……❤ なったばかりの頃なの❤️ 春休み開けても私が少し休んでたの覚えてない？」

妊娠をしていた、しかも塾の先生相手にしたという言葉にまた強いショックを覚える。

そして、優姫に言われて思い出したのは確かに、しばらくの間彼女が休んでいた時期があるということ。

普通に、「病気」としか聞いてなくて純粹に心配していたことをじんわりと思い出しながら、また射精していく。

「その後も❤️ ん❤️ 何回も❤️ 最初が生だったから、かな？ なんだかゴムつけてるとあんまり気持ち良くてなくて……❤ だから、私は100%生ハメ、しちゃってるの❤️ 誰が相手でも❤️」

「生の方が気持ち良いし、おまんこに精液を出して貰うの……すっごく好きなの❤️ もう、我慢なんて出来ないくらい大好きで、おまんこに精液を出して貰ったまま学校に来たこともあるんだよ？」

「だから、避妊の為にピルも飲んでるんだけど、ずっと飲みっぱなしは身体に悪いから飲むのをやめて、ピル抜きするときもあるんだけど、そゆときも❤️ やっぱりエッチしたくて❤️ それで妊娠しちゃった❤️ ふふ❤️ これで、えーっと4回目、かな？」

誰よりも知っていると思っていた優姫のことを本当に、なにも、これっぽっちも知らないでいたことを理解させられてしまった。

既に四回の妊娠、つまりは三回の墮胎を経験しているということ、ボクの知らないところで。

ずっと、ずっと隣にいて、いつも見守っていたと思っていたのに。

絶望なんて言葉が頭に浮かんで消えるボクの目の前で、楽しそうに「妊娠してるって知ると興奮するおじさん結構多いんだよ？ もちろん……マサユキさんも❤️」なんて言う優姫。

変わってしまった……違う。

ボクが何も知らないままただただということをしつかりと思いきらされた。

優姫という女の子のほんの一部しか知らないで、誰よりも知っている、なんて思いこんでいた。

「ん……❤️ あと一回くらい出来るよね？」

そう言って彼女はまた腰を振りだした。

大きなおっぱいを揺らして、髪を振り乱しながら。

もう、何回射精したかもわからないままに、ボクは優姫のおまんこの射精していく。

その射精に合わせるように――。

「あ❤️ イクっ❤️ イクっ❤️ ノリユキくんっ❤️ イクっ❤️ 好きっ❤️ ああああ❤️ 好きっ❤️  
ノリユキくん、好きっ❤️ イクううう❤️」

――ボクのことを好きだと言いながら、優姫はイっていった。

もう、何がなんだか分からない。

ただただ、ショックの連続で頭はクラクラして眠くなっていく。

優姫がさっきのように身体を倒してボクに密着しながら耳元で「この後❤️ 先生とのデート❤️」なんて囁いてきた。

その囁きを拒絶するようにボクは目を閉じるのだった。

――。

――。

「……………ん、あれ？ あれ……？」

「おはよ、優姫……疲れてたの、かな……良く寝れた？」

あの後、少しだけ気絶するように目を閉じたボクは、動きたくない身体を動かして、服を着て、優姫にも催眠アプリで命令して服を着させた。

ボクの精液はおまんこに入れられたまま、服だけを着させたのはささやかな抵抗かも知れない。

優姫を前に上手く笑えている自信はないけど、何事もなく、何も知らないかのように微笑みかけていく。

「あ、私、寝ちゃってたんだ……ごめんなさい、勉強中だったのに」

「良いよ、疲れてたんだろうし……」

申し訳なさそうにする優姫。

そう、彼女は疲れていた。

『最近は毎日の様に大学生の先輩たちのサークルで輪姦されていた』

そう、聞いた。

それで寝不足だって聞いていた。

そして、この後も男との予定があることも知っている。

知っている、知ってしまった、優姫がボクが思っていたような女の子じゃないって知ってしまった。

それでもボクは優姫が好き……………なのかは分からない。

もう、何もわからない、理解が出来ない。

そんな状態のまま、本当にぼんやりと、今まで何度も何度もチャンスがあっても出来なかった告白をあっさりとした。

本当にあっさり「好きです、付き合ってください」なんて、テンプレみたいな告白を。

もう、断られてもどうでも良い、そう思っていた。

だけど、優姫は目に涙を浮かべてまで喜んでくれた。

「嬉しい……………❤️ わ、私もずっと、ずっとノリユキくんが好きだったの……………❤️ ありがとうっ❤️」

「はは……………両想いだったん……………だね……………」

歓喜する優姫をぼんやりと見つめていく。

そして、その後、恋人になったってことでキスをした。

優姫は「ファーストキス」なんて言っていたけど、それが嘘なのは知っている。

その後もスマホを見て優姫が――。

「あ、ごめんなさい。この後、塾の講習あるから……………」

――なんて言っていたけど、知っている。

この後も男と会うことを。

セックスを知っている、知っていながらボクは笑顔でその嘘を受け入れた。

ボクの精液をおまんこに入れたまま他の男に会いに行く優姫。

ボクの彼女になったのに、優姫は他の男と会うことを辞めることは無いようだった。

それを止める気もなかった。

――。

—————。

—————。

「あ❤️ あああ❤️ イっ❤️ んんう❤️」

「はあ！ はあ……っ、今日は……誰としてきたのっ？ 答えて……！」

ボクと優姫は付き合いだした。

付き合いだしたけど、まだ表向きには最初のキスしかしていない。

デートも一回二回しただけだった。

だけどあれからもボクは催眠アプリを使って優姫とセックスをしていた。

催眠にかかっていない彼女とは全く発展していないのに、セックスは何度も何度もしていた。

そして、毎回『今日誰とセックスしたのか』を聞いていた。

ボクと付き合いだしても優姫は他の男との関係を解消していなかった。

むしろ、増えてさえいるようだった。

今も、優姫の部屋、ベッドの上で正常位で生ハメセックスをしながら質問をしていく。

「今日、はあ❤️ あっ❤️ 学校で、体育の先生と❤️ エッチ❤️ したのっ❤️ 二回も中出しされて❤️ んん❤️ お口にも一回出して貰った、のっ……❤」

「体育の……！ 他、他には？ それだけじゃない、でしょ……！」

学校でも当たり前先生とのセックスをしていることを告げてくる優姫。

腰を打ち付ける度に揺れるそのおっぱい、そこに手の揉み痕が刻まれている。

体育担当のゴリラみたいな教師にそこを揉まれながら犯される優姫を想像して、ボクは……興奮してしまっていた。

「あとはっあ❤️ あ❤️ 塾で❤️ 一個上の、他の学校の先輩の、おちんちんしゃぶってまし、たあ❤️ そのあと、お友達も混ざってきてっ❤️ 3人の精液❤️ 飲んじゃった❤️」

「っ！ ……精液臭い口して……！ っ！」

優姫からの当たり前にかされる行為の数々。

ほとんど毎日、してない日が少ないくらいの他の男とのセックス記録。

それを聞きながらボクは、激しく腰を振っていくのだった。

優姫が他の男に汚される姿を思い浮かべて興奮して、ボクが知らなかった彼女の本性を一つ一つ飲み

込んでいく。

これを受け入れることなんて出来ないと思う。

だけど、ボクは優姫と交際を続けていく。

表向きにはまだキスしかしたことのない初心なカップルを装って裏ではこんなことを続けていく。

「今度の、土曜日っ……家族で出かけるからデート出来ないって言ってたけど……本当のこと、言ってよ……！」

常に男の影が優姫にはまとわりつく。

ボクは彼女の『表』の言葉は何一つ信じられない。

「土曜日、はあ……♡ んっ♡ 久しぶりに乱交パーティー、しちゃうの♡ 30人くらいで大きなパーティー♡ だから、ノリユキくんとはデート、出来ないのっ♡」

「っっ！！」

ボクとの、恋人とのデートよりも乱交パーティーを優先する彼女。

そんな優姫とボクは、歪で壊れた恋人関係を続けていく。

いつか、いつかボクが本当に壊れてしまうまで——。

——。

—————。

—————。

「また寝ちゃってごめんね？ あ、それじゃあ、また明日ね？ おやすみ、ノリユキくん♡」

「うん……おやすみ……」

私の部屋でノリユキくんとお喋りしてたのに、急に寝ちゃって気づけば夜。

そろそろお開きということで玄関まで彼をお見送り。

しっかり手を振って「私って疲れてるのかな～？」なんて考える『フリ』を終えたら小さく微笑む。

「ふふふ♡ 今日可愛かったあ……♡ 必死に腰振って……♡ 私が他の男の人とエッチするの、

そんなに好きなのかな、クスクス❤️」

ドアを閉めながら思い出すのは今日の、ううん、今日までのノリユキくん❤️

催眠アプリ、なんてあんな『何の効果もない』アプリで私に催眠をかけられてると思ってるみたい❤️  
それがスッゴク可愛い❤️

「でも、そのおかげで恋人になれたし童貞も貰えたし❤️ 催眠アプリのおかげ、だね❤️」

催眠にかかったふりして、私の本当の姿を教えてあげたけど、その時のノリユキくんのリアクションは本当に最高❤️

涙まで流してて、そんなに私のことを好きでいてくれたってことが本当に嬉しかった。

だからこそ、もっともっと見たくなっちゃう❤️

「催眠になんてかかってないって知ったら……ノリユキくん……どんな顔するかな？ ……ふふ❤️」

今はまだダメだけど、いつか、いつか全部バラしたとき、どんな顔をするのか、考えただけで楽しくなっちゃう❤️

ペロリとはしたなく舌なめずりをしたら、今日も私は他の男の人のところに向かうの❤️

きっと、今度もまた凄く良いリアクションをしてくれると思うから❤️

自分の部屋に戻ったら、おまんこから垂れてくる精液を舐めとってペロリ。

私を必死に犯してくれた精液の味はスッゴク美味しく感じられちゃう❤️

この興奮のまま今日、この後会うのはマサユキさん❤️ ノリユキくんのお父さんとのエッチ。

スマホを取り出して、マサユキさんにかけて、この後の約束の確認。

「もしもし？ 優姫です❤️ はい……❤️ この後、はい、駅の裏手の公園で待ってますから❤️ 今日  
もいっぱい可愛がってくださいね？」

電話口から聞こえてくる興奮した声。息子と同年で幼馴染の私に凄く興奮してくれているのが伝わってきて、それでさらに興奮しちゃう。

ノリユキくんに出して貰った精液を塗り込むようにおまんこを指で弄っちゃう。

「あの……今度の出張の時、ついていっても良いですか？ たまには周りの目も気にしないで……❤️  
二人っきり旅行、とか❤️」

私の提案にマサユキさんは凄く喜んで興奮してくれてる。

これをまたノリユキくんに教えてあげるときがスッゴク楽しみ❤️ 今から興奮しちゃう❤️

「ふふ……❤️ 今度はノリユキくんの赤ちゃん……❤️ 作っちゃおっかな？」

電話を切ったら、着替える為に服を脱ぎつつ、指についた精液舐める。

舐めながら、今度妊娠したらノリユキくんはどんな顔するかな？ なんて考えちゃう。

しかも、どうせ他の男の子供だって思っている彼に、ノリユキくんの子供だって教えたら……❤ どうなるかな？

「ん～❤ 赤ちゃん墮胎して……❤ 少しお腹休ませて……❤ ふふ、夏休みには出来そう、かな？」

もし、本当に自分の赤ちゃんだと知ったらノリユキくんは産んで欲しがる？ それとも墮胎しろって迫ってくる？

どっちにしても凄く良い顔見せてくれそうで今から楽しみ❤

「ふふふ……❤ 大好きだよ？ ノリユキくん……❤」